

前回の中級編その3を受けて、「自閉症支援とは何か？」と問われて、こう答えることにしましょう。「彼らの〈本当の気持ち〉を知り、それに応える実践をすること」と。

しかし、皆さん、ご存じの通り「本当の気持ちを知る」ことは、そう簡単なことではありません。なぜなら、どんな重い障害があっても、対人関係には、必ずヤマアラシのジレンマが生じます。接近しよう（依存しよう）とすると、回避しよう（甘えちゃいけない）とする気持ち〈接近－回避葛藤とクルト・レヴィンは呼びました〉が、同時に起動するからです。そして、本当の気持ちの方が勝って、行動化されれば、何も問題がないのに、本当の気持ちを隠す方向で、行動化されることが多いことが、さらに状況を悪化させます。

生じてしまった行動の多くは、心のコントロールを失っています。自分一人では、どうにもこうにも行動をコントロールすることができないのです。また、いつも同じような行動をとっているうちに、自閉症の同一性保持がさらにそれを後押しして、異なる行動をとることを困難にします。

したがって、この行動は、ひょっとしたら接近－回避行動かな？と支援者が考えた時に、初めて支援はスタートラインにつくことができます。思えなければ、支援は、スタートラインにつくことができないまま、彼らは負のスパイラルの中でもがき苦しみ、泥沼にはまって行ってしまうのでしょ。

まずは、内面の感情の言語化です。そして、それには、ポジティブメッセージという調味料を足します。重要なのは、体をちょっと止めさせてもらうことです。

J男さんなら、本人50、支援者50の力で、ちょうど二人の力が拮抗する形で、体を止めさせて頂きながら、「本当は、褒められて嬉しかったんだよね。今のあなたは、そう思っていないかもしれないけれど、あなたには、たくさん良いとこ

ろがあるんだよ」と言い続けることです。

K男さんなら、近づいて来る度に「ほら、やっぱり伝えたいことがあるんだ。お便所かな？伝えてくれて嬉しいなあ」とちょっと体を支えながら、お便所に誘導してしまふことです。この時の体の誘導の力の入れ具合は、本人50、支援者50の拮抗状態です。拮抗状態で支援すれば、本人の主体性を感じながら、誘導することができます。

M男さんの抓りも、ちょっと止めさせてもらいます。止めないと実際に支援者も痛いですし、さらに心のコントロールを失っている行動ですから、やっている本人は、止めて欲しいと願っているに違いないからです。そして、こう伝えます。「仲良くしたいと思っているのに、どうしても抓っちゃうんだよね。そんなに僕は悪い子だって、しなくたって、ちゃんと仲良くなれるよ。だって、みんなあなたが、本当は優しくて良い子だって、知っているからね」と。

K子さんなら、「本当は〇〇さんには、お嫁に行って欲しくないよね。いつまでも一緒にいたいんだよね。自分がいつも迷惑をかけているから、辞めてしまうんじゃないかって、心配になっちゃうんだよね」と内面の感情を言語化しながら、「〇〇さんは、いつまでもK子さんの幸福のことを考えていたいんだって。あなたは幸福になっていって良いんだよ」とポジティブメッセージを届けます。

T子さんには、「自分でできることは、自分でしなさいって言われて、ずっと頑張ってきたんだよね。人間、ときには、甘えたい時もあるよね。電気毛布、気持ち良いよね、温かくて。一緒に出そうか？」と対応します。

ここに今挙げた対応は、感情の言語化という処方箋です。この処方箋は、漢方薬のように、毎日、全支援者が提供し続けることでジワジワと効いてきます。自己肯定感の醸成が、回避衝動を減少させ、次第に接近行動を行動化させるようになるからです。